

## 4. ネパールに関係する「外邦図」(インド測量局調製)について

薬師義美(日本山岳会会員)

### 1. はじめに

2009年7月25日、東京の川喜田二郎先生のお別れの会に参列したとき、小林茂先生に久しぶりでお出会いした。その折、編著『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』(大阪大学出版会、2009年2月)を本屋で立ち見し、拝見したことをいうと、浅井辰郎先生のレポートにあなたの名前が出ている、帰ったらその資料を送ろう、といわれた。

帰宅してしばらくしたら、大冊の『お茶の水女子大学所蔵・外邦図目録』(2007年1月)が送られてきた。そのページを繰って私はおどろいた。

浅井先生の「資源科学研究所の地図の行方—多田文男先生の英断」の7ページに次のような記述があった。「十番目は立命館大学大学院の薬師義美氏で、三十五年春来信あり、ヒマラヤの文献集を戴く。七月、上京してインド二十五万を二十八枚持ち帰る。八月上京して四千二百円支払い、インドの十二万五千を探すがなし。…。まさにその通りであるが、年代・枚数・価格のことは失念していた。これは恐るべきメモである。1枚が150円であったことなど、まったく記憶になかった。

私が地理学科の院生のとき、山口平四郎先生から、ヒマラヤ地域の地図が東京の資源科学研究所にあるらしいから、浅井先生に連絡を取れといわれ、紹介状をもらって大久保の資源研へ出かけた。それからもう半世紀がすぎたが、譲り受けた28枚の地図はいまも手元にある。

### 2. 「外邦図」の山賊版の出現

資源研へ出かける2年前、昭和33(1958)年春に東京でネパール・ヒマラヤの多色刷り25万分の1の地図が5枚セットで売り出された。頒価3,000円では当時として高かった。主に登山関係者の間に出回ったようだが、私が入手したのは吉田書店(杉並区阿佐ヶ谷、いまはない)、登山家の故・吉田二郎氏が

やっていた山岳図書専門の古書店で、いまに残る封筒の消印は5月9日とある。それから50年、だれが、どこで、何部作製したのか、その出所などはまったくわからない。

5枚をつなぐと、エヴェレストからマナスル峰までの範囲となり、カトマンズが中ほどにくる。それらは次のようである。

71-D GURKHA

71-H GOSAINKUND

71-L TINGRI DZONG

72-E KATMANDU

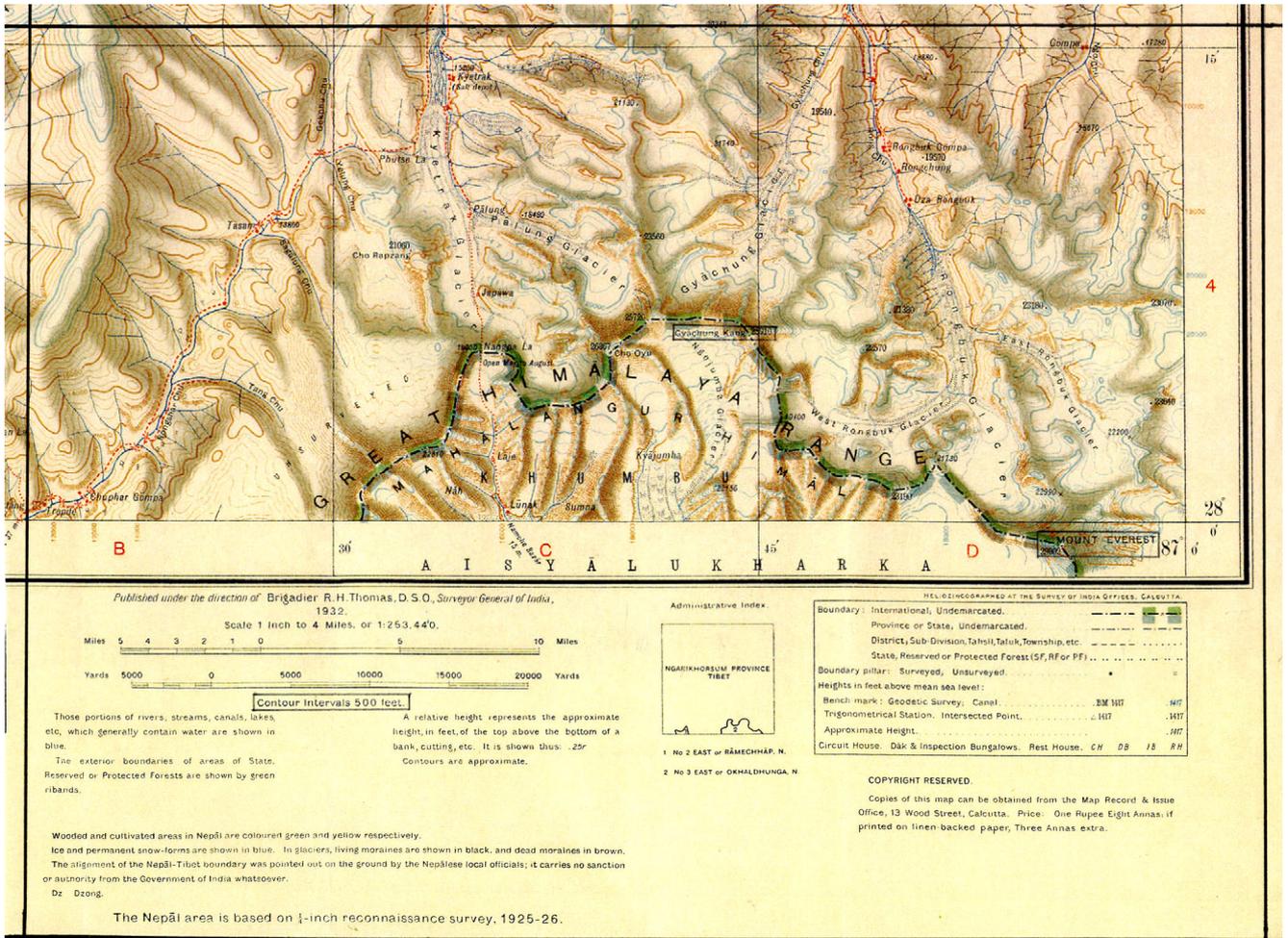
72-I MOUNT EVEREST

お茶の水女子大(Aセット)の目録には、これらのうち71-Hと72-Iがないから、どこかで抜け落ちたのであろうけれど、5枚セットはどこから流出し、どこでコピーされたものであろうか。参謀本部陸地測量部の版はインド測量局の原図のコピーだから、私はこれを「海賊版」といい、そして5枚セットはさらにそのコピーであるために「山賊版」と呼んでいる。

この山賊版を持って、私は1965年にネパールに出かけた。中部から東部へ、つまり、ティリツォ湖からアンナプルナ山群一周、エヴェレスト山群からピラトナガル、冬のゴサインクンド越えと、約5か月間にわたり、ネパールを歩きまわった。そして地図はかなり正確なことを実感した。しかし、1958年の川喜田先生の西北ネパール学術探検隊では、これらの地図の存在を知らず、インド測量局の50万分の1の地図を持参したと高山龍三先生がおっしゃる。私はそれも持っていった。いずれにせよ、山賊版にはエヴェレストより高い山が出現し、当時、識者の間で話題になったものである。それは次に述べよう。

### 3. 原図・海賊版・山賊版の比較

まずは第1図にインド測量局(Survey of India)の



第1図 インド測量局<1インチ4マイル>図(部分)

No. 71-L (Tingri Dzong) 1:253,440 1932年版

60%縮小。筆者による記入あり。

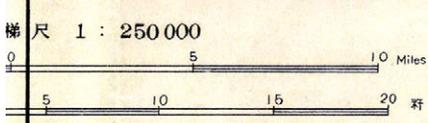
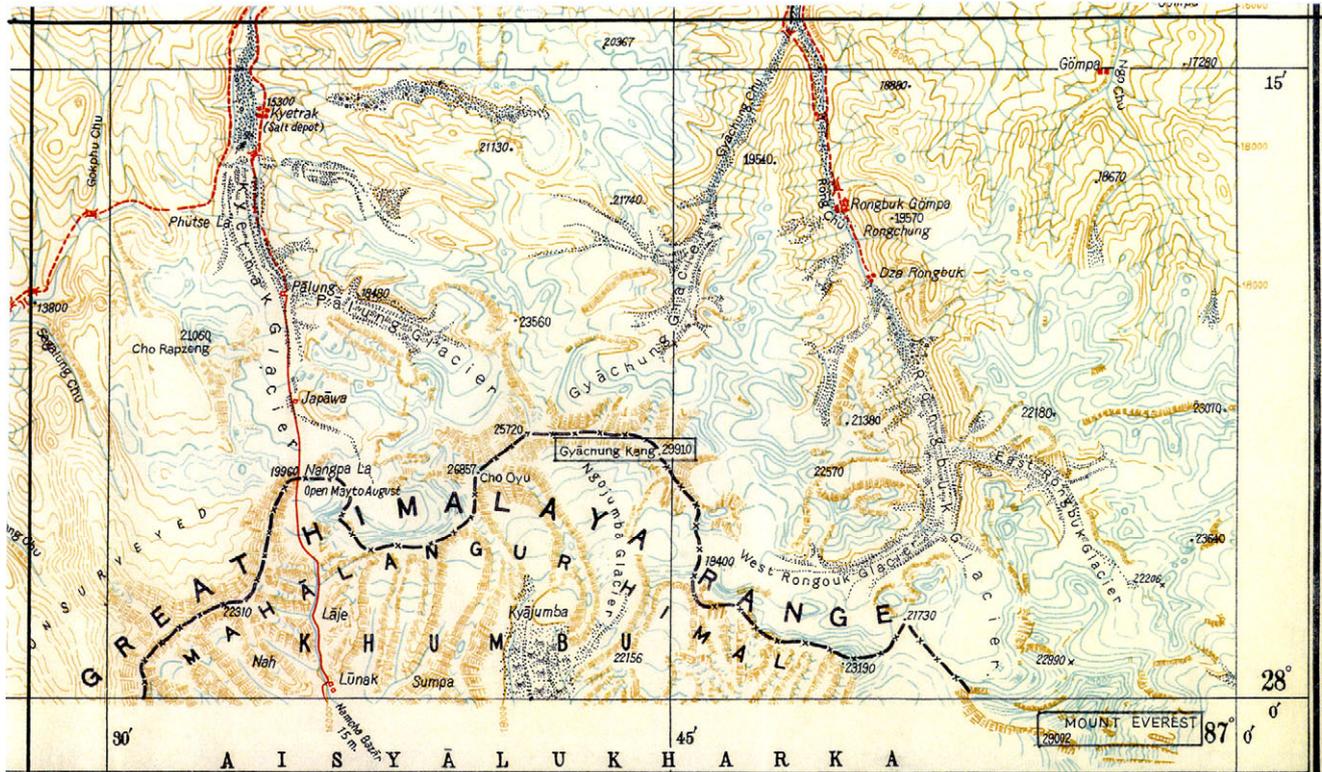
「71-L (Tingri Dzong)」の図を示す。1932年の発行である。これは戦前に洋書輸入店から買ったそうで、わが国のヒマラヤ研究の第一人者・故諏訪多栄蔵氏の没後、私のところに来たものである。そして第2図に参謀本部陸地測量部の「海賊版」、第3図に出所不明の「山賊版」を掲げて、以下に比較・検討をしてみたい。

山賊版でエヴェレストより高い山といわれたのは、チベットとの国境上のギャチュン・カン (Gyachung Kang) である。インド測量局の原図は「25,910ft=7,897.3m」、海賊版も同じなのに、山賊版は「29,910ft=9,116.5m」。5と9の転記ミスである。同様のミスは「71-D」図にも見られ、マナスル西方の無名峰(いまのプンギ?)に海賊版が20,992ft=

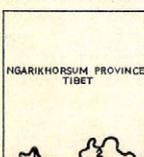
6,398m(現在は6,584mか)を与え、山賊版は26,992ft=8,227mとする。これは0と6の転記ミス。エヴェレスト峰については、3種類とも同じ数字の29,002ft=8,839.8m。1997年のネパール測量局の5万分の1の新地図によれば、ギャチュン・カンは7,861m、エヴェレストは8,848mである。写真1のギャチュン・カンは私が撮影した航空写真で、1964年春に長野県山岳連盟隊が初登頂に成功した。

またインドの原図では尾根に陰をつけて、曲がりなりにも陰影法を工夫しているが、海賊版にはそれがなく、山賊版の数字の誤記を見ると、海賊版をそっくりそのまま複写したものではないことがわかる。どちらかといえば、山賊版のほうがきれいで見やすい。当然のことながら、海賊版の右肩の「秘」、左肩





Administrative Index.



- 1 No 2 EAST OF RĪMACHHĀP. N.
- 2 No 3 EAST OF ORHALDHUNGA. N.

呎米換算表

呎	米	呎	米
10	3.05	200	60.96
20	6.10	300	91.44
30	9.14	400	121.92
40	12.19	500	152.40
50	15.24	600	182.88
60	18.29	700	213.36
70	21.34	800	243.84
80	24.38	900	274.32
90	27.43	1000	304.80

標高ハ呎ヲ以テ示ス  
 曲線等距離ハ500呎(152.40米)トス

村落、團聚ナキモノ、アルモノ、飛村、飛址、遺蹟、.....

小屋、(永久的、臨時的) 堡壘、塔、墓舎、.....

教会、回教寺院、寺、仏塔、簡素ナル回教寺院、墳墓、.....

ダム(石造、土造) 「マドラス」ノ木堰、.....

灯台(灯台船、浮標(灯火アルモノ、ナキモノ)) 碇泊場、.....

草(高キモノ、低キモノ) 甘蔗、竹、バナナノ一種、.....

パム、アルカ、バルミラ等、針葉樹、其ノ他ノ樹木、雑林、.....

耕作地、疎林及密林、.....

等高線、不明等高線、岩石斜面、巖岩、.....

崖、砂丘(測定、未測定) 砂礫原、.....

雪及氷形体、(1)氷河、(2)氷堆石、(3)氷孔窟、.....

(4)氷母岩、(5)万年雪、.....

境界、国界、.....

都又ハ州界、.....

国都又ハ州界ナキモノ、.....

地方(又ハ縣界)界、.....

地区、準地区(又ハ教区)界、森林界、.....

国境柱、測定、未測定、.....

基、油田、鉱山、日付アル戦場、.....

三角点、標高点、觀測標示点、比高、.....

水準点、運河水部、交差点、.....

### 第3図 出所不明の「山賊版」(部分)

No. 71-L (Tingri Dzong) 1 : 250,000 昭和33年5月

75%縮小。筆者による記入あり。

うすると、山賊版を作った人物(あるいはグループ)は「ただ者」ではなかったように思われる。

#### 4. ネパールの測量と地図

ネパールは第二次大戦が終わるまで、長い間、鎖国政策をとってきた。したがって、わずかに許され

た外国人入国者も、その行動範囲はカトマンズ盆地内に限られていた。J. D. フーカーの東ネパールの探検は例外中の例外であった。そこでインド測量局は19世紀後半にサイン・シン、ハリ・ラムなど、パンディットと呼ばれる現地人密偵を潜入させて、地図を作ろうとした。またネパールの高峰の高度は



写真1 ギャチュン・カン（筆者撮影・航空写真）

遠くインド平原から測量した。それは 1850 年前後のことであり、インド平原から観測した「Peak XV」という峰が計算の結果、世界の最高峰と判明したのが 1852 年、そして現地名がわからず、測量局長官の名前から「エヴェレスト峰」と命名された。

ネパール全土の本格的な地形測量は、ようやく 1924 年からはじまった。それは当時の宰相チャンドラ・シャムシェール・J・B・ラナの要請によって、インド測量局が 1924 年 11 月から 27 年 3 月にかけて行ったものである。しかし、この時でも写真の撮影は禁止で、イギリス人将校（測量官）の監督・同行を許されず、すべてインド人測量士が現地調査をしたのであった。

この測量の結果は 1 インチ 4 マイル、通称「クォーター・インチ・マップ」（縮尺 25 万 3440 分の 1）としてまとめられ、1929 年から 30 年代のはじめにかけて刊行された。ネパールの関係図幅は全部で 28

葉、経緯度は各 1 度で区切られている。だが、これらは時間的な制約と、ヒマラヤのけわしい地形のため、いろいろミスが見られた。

ネパールでははじめての本格的な登山隊である 1950 年のフランス隊は、目標のアンナプルナ I 峰を捜し求めて、右往左往した。途中で地図にない大きなティリツォ湖を発見したあと、人類最初の 8,000m 峰の初登頂に成功する。『処女峰アンナプルナ』は世界各国でベストセラーとなり、アンナプルナという名前は世界的に有名になった。

第二次大戦中にはイギリス陸軍省参謀本部地図局（London, War Office）がインドのものを複製し、1953 年からは一般に公刊したが、アメリカの工兵部隊地図局もインド測量局の地図を複製した。ネパールに関係する部分は 1944～50 年に出版、さらに 1954～55 年には縮尺を 25 万分の 1 に改め、再編集されたものが通称 AMS (Washington, Army Map Ser-



第4図 ネパールの新地図（部分）

左：No. 2886-15 右：No. 2886-16

1：50,000 1997年

70%縮小。筆者による記入あり。

vice)の「U502 シリーズ、インドおよびパキスタン」であった。図幅の範囲が広がったため、ネパールの部分は19枚である。

そしてインド測量局では、1955～58年にネパールを4万分の1で航空写真測量をし、地上の再測量

は1958～65年に5万分の1の縮尺で行った。その結果は1957年から次つぎと刊行された。この新地図は1インチ1マイル、「ワン・インチ・マップ」といわれ、縮尺は6万3360分の1、わが国の5万図に相当した。しかし、これには「マル秘」に相当

する「Restricted」が印刷されて、一般には目にすることはできなかった。ネパール全土を 274 枚でカバーするといわれたが、ネパール政府の関係部局で使われていた。私は 1969 年のグルジャ・ヒマール遠征のとき、外務省の登山担当官から新地図を借り出し、関係図幅をコピーさせてもらった。これは正式の登山許可証を持っていたからできたのだ。

インド政府から提供された 300 セットの新地図も、各部署で酷使されて消耗。そのためにネパール政府は原版の譲渡の交渉をしたらしい。元観光大臣のハルカ・グルン博士の話である。しかし、それがうまくいかなかったのかどうかは知らないが、1990 年代からネパールの政府機関の測量局 (Survey Department) が航空写真を使用し、地形図を作成しはじめた。そして 90 年代後半から公刊しはじめる。

釈迦誕生のルンビニ周辺はわが国の JICA (いまの国際協力機構) が担当・協力し、他の大部分はフィンランド政府の協力・援助によるが、北部の山岳地帯は 5 万分の 1、南部は 2.5 万分の 1。全国が完成し、市販されており、本局や代理店で購入することができる。ネパールも自前の地図を持つことになったのだ。

## 5. おわりに

しかし、この新地図に手放しでよろこぶわけにはいかない。手元にある Sheet No.2786-04 (Sagarmāthā) 3 枚のうちの 1 枚は、印刷ズレのある不良品 (いや貴重品!) である。また、アンナプル

ナ山域の氷河の面積が広すぎる。氷河と積雪の区別が航空写真でしにくいいため、降雪を氷河としてしまったものであろう。地上からの現地調査が不十分なのか、机上だけの作業ですませたのか。現地を知るものの目からすると、これはいただけない (その後、修正されているかもしれないが…)。こうなると、他にも似たような例があるのでは、といささか心配になってくるけれど、大縮尺の地図が自由に手に入るようになって、本当に素晴らしい地図、そしてネパール万歳! といいたくなってくる。

### 参考文献

お茶の水女子大学文教育学部地理学教室『お茶の水女子大学所蔵・外邦図目録』(2007 年)

Survey of India 『Survey of India: Map Catalogue』(Calcutta, 1945)

Harka B. Gurung 『Maps of Nepal』(Bangkok, 1983)

薬師義美『ネパール・ヒマラヤの地図と標高』(「岩と雪山」と溪谷社、No.100、1984、p.58-73)

薬師義美『大ヒマラヤ探検史—インド測量局とその密偵たち』(白水社、2006 年)

[追記] 小林先生ご教示の『外邦図ニューズレター』No.3

(2005 年 3 月)、「終戦前後の陸地測量部」(p.14) によれば、海賊版の右下の小さな○印のマークは、印刷の下請け民間会社のもので、⊕が凸版印刷、⊗は光村原色版印刷、⊕は共同印刷、⊕は中田印刷と、印刷の責任をもつ印刷所の名前であった。